

弔 師 孝 義 の 生 涯

1 生い立ち	16 決意
2 旅立ち	17 退路
3 修行	18 周到
4 自立	19 オホーツク
5 大恐慌	20 助っ人
6 御用達	21 意気
7 職人集	22 遠い昔
8 風流	23 時の流れ
9 大戦	24 巢立ち
10 故郷	25 進出
11 空白	26 祐正
12 瑞穂会	27 帰参
13 再開	28 新和弓
14 出会い	29 賑わい
15 要請	30 伝承

御弔師 『孝義』の生涯

寺内末吉（1908（明治41）年～1993（平成5）年）

1. 生い立ち

父：寺内伊太郎（1958（安政5）年～1908（明治41）年）

母：寺内きよ（1963（文久3）年～1952（昭和27）年）

長州 岩国藩出身 代々漢方医

明治維新政府は、国策として数次に渡り北海道開拓団を編成した。

1885（明治18）年次北海道石狩郡石狩高岡地区の開拓に、岩国からは20戸106名が入植。

寺内家は、医療衛生分野の任務を兼ねていた。

末吉はこの両親の次男として明治41年3月に生まれたが、父 伊太郎は末吉の生後10日目に病により死去した。母 きよは、1950（昭和25）年まで助産師として地域近郊を支えた。

2. 旅立ち

1918（大正7）年 春 内気で繊細な末吉少年は、伯父である弓道家松本金義に手を引かれて生家を離れ上京。弔師菅井正孝の門下生、内弟子となった。

3. 修業

内弟子は無給の奉公人であり、緊張の日々であった。厳しい毎日に望郷の念に駆られることもあったが、故郷は遠くひたすら仕事に励むしかなかった。正月と盆年2日の休日に些少の小遣い銭を与えられての上野、浅草見物が最大の楽しみであった。この時期各流、各派の弓道家の知遇を知る機会ともなった。

4. 自立

1927（昭和2）年 晴れて年季を明け、師の「正孝」より「孝」の一字を賜り、弔師「孝義」となった。門出の祝いに「孝義」の角印に添えて300余りの家紋一式を申し受け本多流師範松本金義の待つ神奈川県横須賀に向かい、汐入町2丁目8番地にて寺内弓具店弔師孝義として一步を踏み出した。横須賀は帝国海軍の街時は大恐慌の前夜であった。

5. 大恐慌

深刻な不景気は世界に広がり、日本経済をも巻き込まれたが…海軍鎮守府の要港横須賀に関しては別世界のようであった。

孝義は、横須賀から鎌倉、藤沢、横浜へと少しづつ販路を広げ、やがて遠く北海道、東北、北陸方面からも依頼が来るようになり、商いは軌道に乗っていった。

6. 御用達

この頃縁あって海軍将校の長女萬亀子と所帯を持つこととなり一層仕事に励んだ。やがて周囲の支援もあり、鎮守府御用達となり商売は繁盛、多忙であったが人生最良の充実した10年であった。海軍への大量納付は、数、品質、納期すべてに厳格、大変なことだったが、絶大な信用力をはじめ受け取るものも多く、やりがいのある仕事だった。

7. 職人衆

店には季節順に、弓師、矢師、諜師、その他の職人たちが逗留し、顧客も多く大変な活況だった。これらの職人諸氏の接遇のためにしばしば夜の浦賀水道に船を漕ぎ出し黒鯛を釣り上げ、妻萬亀子は女中（住み込みのお手伝いさん）と近所のおかみさんに助けられ、刺身にしてふるまつたりした。

全国に、関東に、多数の弓具職人がいた古き良き時代であった。

8. 風流

孝義は、定期的に開かれた句会に熱心に出向き、俳人として認められ、宗匠名「松岱庵」を授かり、関東16歌仙の一人に選ばれたりした。

小説家であり、俳人久保田萬太郎、ホトトキスの歌人高浜虚子等と盛んに交流。風流を解する人だった。

9. 大戦

1941（昭和16）年 開戦 序盤一瞬の戦果に沸いたが次々と発出される公式発表とは裏腹に社会生活は余裕がなく、閉塞感が強くなつていった。

すべての物資不足が始まり、特に食糧不足は日を追つて厳しくなつた。昭和19年になると、乗用はさらに悪化。連日横須賀上空遙かを米軍のB29爆撃機編隊が通過し後刻横浜、川崎、東京方面の空が真っ赤になつた。いわゆる空襲である。誰もが不安な世情となつていった。食糧事情は一層深刻になり、リュックサックいっぱいの米を入手するために同量のお金が必要となつた。

10. 1944（昭和19）年春、初めて帰省した。

旅立ちから四半世紀を経ていたが、故郷は暖かく迎えた。そこは、戦時下でありながら都会とは違い、別世界の穏やかでのんびりした昔ながらの暮らしであった。

迫りくる戦禍を避け、家族を守るため戦時疎開をした。昭和19年8月、8才の長男、5才の次男を連れて先発。続く10月妻萬亀子と3才の3男、4か月の4男、女中の4名で故郷石狩郡石狩町高岡に逃げ込んだ。昭和20年4月赤紙令状により招集。川崎連隊配属同年8月終戦。軍国日本崩壊。敗戦国の悲惨な戦後がはじまり、連合国軍GHQの支配下となつた。

11. 空白

終戦後の混乱の中で、1946（昭和 21）年日本の武道はその在り方を問われ禁止となり、總本山大日本武徳会は抜本改革を余儀なくされた。

弓道に於いても模索が続けられ、弓道連盟を立ち上げ、再出発に備えた。1951（昭和 26）年禁止令は解除となったが、弓具職人にとってこの 5 年は短い期間ではなかった。

かつて全国には大勢の職人がいた。関東にも 100 人を超す弓師、矢師、蝶師及び関係職人が競っていたが、5 年の空白を乗り越えられず復帰かなわないものも多かった。日本中が自信を失っていた。孝義は故郷で米作りに励み、育ち盛り 4 人の息子たちの空腹を満たした。やがて疎開生活を支えてくれたお手伝いさんは、栃木の里に帰っていった。また、教員不足のこの時代、免許を持っていた妻萬亀子は、壊れて小学校の教師となり、その後定年まで勤めることになる。

12. 瑞穂会

疎開先は、のどかな田園地域。水道はなく、電気不通の地域でもある田舎で、若者は文化に飢えていた。孝義一家は、いわゆる町から来た家族であった。粗末な仮住まいには農閑期になると人が集まるようになり。集いは「瑞穂会」と名付けられた。農作業のこと、和歌、俳句、百人一首、囲碁、将棋、菊造り、菓子作り、海釣り、等々多岐にわたる交流、交換は、娯楽の少ない時代であり、地域の一助となった。一方萬亀子は教職の傍ら親御さんに懇願され、娘さんたちに生け花、お茶、書などを教え、大いに喜ばれた。

13. 再開

1951（昭和 26）年 秋 仮住まいに懐かしい知古の訪れがあった。

横須賀当時の顧客で本多流弓道家、川原㐂助氏はオホーツク地方遠軽の人だった。列車を乗り継ぎ、石狩の奥地に暮らす孝義の前に現れ、挨拶もそこそこの一言は心に響いた。

「探して探してようやく探し当てました。貴殿はこの里に隠れて農作業に勤しんでいる人ではない。どうか我々と北海道の弓道を助けてほしい。」

氏は、日本弓道復活の志に燃えていた。

三日三晩に及び、丁寧でまごころこもった要請を続け、去り際に言い残した。

「来年一人連れてきたい」

14. 出会い

翌 27 年 秋 1 人の紳士を伴って再び現れた。

「私の弟子の原と申します。未熟者ですが、育てていただけまいか」

立派な偉丈夫であった。のちの天皇杯覇者範士原正一氏である。その晩、3 人は夜更けまで日本弓道の進む道について話し込んだ川原氏は、篤実にして雄弁、原氏は、温厚寡黙な人だった。この出会いから孝義没するまで 40 年余りの長い交流の始まりであった。

15. 要請

翌朝、原氏を先に返し、川原氏はさらなる滞在となる。季節は稻刈り後の一年で最も多忙な収穫の秋であった。日のある中は不慣れな取入れを手伝い、夜は日本の北海道の現状、今後の流れを徹底的に論じ、一つ一つが心のこもった丁寧な会話が続いた。氏の目的は、<孝義の復帰>の一点だった。了解するまでは帰らないとの気迫と覚悟が見えた。気が付けば滞在は10日余りとなっていた。

16. 決意

世の中が落ち着いたなら、すべてが揃っている横須賀への期間は、既定の疎開生活であった疎開とはそういうものである。

戦中からの混乱をやり過ごし、食糧難を解消、自信のこの地域での立ち位置、妻の奉職、子供たちの成長とりわけ川原耗助氏との再会、加えて原正一氏との出会いはこの地での明日を思い描くことを可能とした。

17. 退路

翌 昭和28年、横須賀のすべてを引き払い退路を断った。かつて門出の祝いにと市から送られた家紋の印一式は大半消失。60個足らずが手元に残った。痛恨の極みであった。留守番を任せた人の幼い子供たちのおもちゃに使われていたのだ。物の乏しい時代のなせるのことだった。

石狩の大地に根を下ろし、当面は半農の暮らしである。つい数年前の食糧難を思うと米作りは用心のためであった。

18. 周到

およそ10年の空白を埋め戻すのは容易ではなく、なすべきことは多かった。ぐずぐずしている暇はない。鹿皮、絹糸各種、もち米白玉粉の手配。

多様の刃物と砥石類、火鉢一式と鎌各種、数十本の指木適宜番手の針、こちやば、裁ち板、糊板とへら、物差し類ガラス板、等々、横須賀当時の品々は全て生き足らざる道具は手作りした。

手始めに妻の蝶、引き続き身近な人々の蝶にかかり予想道理の仕上がりに手ごたえを感じ、自信を取り戻した。

19. オホーツク

最初の仕事は、原正一氏の作品だったが、満足のいく会心の出来栄だった。

後年、原氏は教師7段、8段と階段を上り、矢が出範士となり弓道を極めた。川原氏の指導力は、地元の遠軽のみならず、網走市、北見市を含むオホーツク地方およそ20市町村に地区連盟を立ち上げ、弓道王国となつた。

氏の強力な後押しによって、注文が一気に集まり、一人で対処しきれなくなるのは明白となる。

20. 助っ人

修業時代からの存じ寄りに泉祐正という蝶師がいた。同門の菅井利休師の門下生であり、横須賀海軍御用達当時の助っ人の一人であった。この祐正に応援を要請した。

祐正は快諾し、1954（昭和29）年初冬両手いっぱいに手土産を抱え、津軽海峡を越えてきた。数十年ぶりの再会であり、互いの来し方、旅のよもやま話などに花が咲いた。

21. 意氣

二人共たたき上げの職人だった。

掌、各部位の寸法を合わせるのは当然のこと、顧客一人一人の特長をつかみ、事情に合わせることはさらに大変なことである。

仕事に取り掛かると流れの中で自ずと役割分担は決まった。

顧客と向き合い、手形を申し受け、特徴をつかむ。雲南の抽出、帽子の挿げ込み、弦枕は孝義、雲南を裁ち込み、部品をそろえ、張り込み、腹とひねり皮、帯の担当は祐正。

手形からの寸法割り出し、蝶防止と井越、鏝さばき針裁きなどは、二人でと、息を合わせた仕事はゆったりとした時の経過の中で次々と作品を完成させていった。

22. 遠い昔

仕事に打ち込む孝義と祐正。

10歳の少年の目には驚きの連続だった。

刃物を研ぐ姿、仕上がりの切れ味、鏝でどんどん形が変わる。絹糸の美しさ、物珍しい道具類の数々。何よりもそれらを使って物ができるてゆく…

そんな光景は見たことがない

田舎しか知らない子供たちには、すべてが新鮮だった。学校が終わるとすっ飛んで帰り、日仮名自分にへばりつくこの少年を祐正は何かと可愛がった。孝義の末息子のちの2代目孝義である。

孝義には、別の感慨があった。何もわからず伯父に手を引かれ旅だった遠い昔自身と同じ年だった。

飽きずに見続ける子の息子に、物づくりとは、準備が半分、仕掛が半分、作品と刃物、砥石とのかかわり等々少しづつ初歩的な基本の形を教え込んだ。

23. 時の流れ

戦後も10年余りを経て、社会は混乱を脱し、落ち着きを取り戻していった。商いが盛んになるにつれ、米造りは小さくしていった。町の依頼で教育委員、地区農家の要望で土地改

良区理事などの公職、北海道新聞の地方通信記者として地域の話題の発信を頼まれたりした。

25. 進出

20 年の至福の時を乗り越え、ようやく片田舎から脱出し、札幌 手稻に進出できたのは 1964（昭和 39）年であった。駅近の店は、遠方の弓道人との接触も容易にした。高校生、大学生の学生弓道も徐々に盛んになり、初心者用の用具が足りなくなるのが見えていた。寒冷地の北海道では、冬の体育授業にスキー、スケートを取り入れており、息子たちの進学先はスキーでだった。

強化剤にグラスファイバーを用いたスキーも登場しており、息子の提案で南九州の弓師に素材のシートを送付し、試作を依頼したのは東京オリンピックの年であった。

26. 祐正

大学生となった義治は、東京杉並に祐正を訪ねた。ほぼ 10 年ぶりの再会に祐正是刮目し、家族全員で快く迎えた。

都合 20 回の訪問の間に祐正是自身の技と理論、加えて菅井利休氏の技法を惜しみなく伝えた。やがて祐正是故郷の会津に戻り、「丁匠」と名乗った。

27. 帰参

家業は多忙となり、一人では手に負えなくなっていた。大学を出て社会人となっていた息子の中で乗用を察したものは時を違えて参入し、それぞれに得意を発揮した。

義治は自分の任務を心得ていた。当面は新しい弓の商品化であり、並行して弾師の修業である。どちらも長い時間を要するものであった。

28. 新和弓

かつての試作品は、期待通りではなかった。伝統の職人に未知の素材の使用は無理押しであった。発想を変えて取り組み、改良を繰り返し、実射試験にこぎつけた。

近隣の高校、大学の弓道部、有志の若者は快く応じた。いずれも好評だった。

最終関門は、全国の弓具店の評価を残すのみとなった。義治は、車に満載のサンプルとともに小樽港から敦賀を経て全国を巡り、行く先々で大歓迎を受けた。安心な商品を皆が待ち望んでいた。

29. 賑わい

新和弓は全国の若者に受け入れられた。春になると近隣の学生若者の皆さんのが津波のように押し寄せ、遠方の人々は、巡回販売を待ち構えていて商品は飛ぶように売れた。弓具店は横須賀当時を上回る賑わいになり、すべてが順調であった。

30. 伝承

残された大きな仕事は、自信が成人するまでの 10 年余り、師の「孝義」より受けた薰陶とさらに半世紀を超える自身の「工夫」のすべてを次代に引き渡すことだった。息子義治に期待したのは必然だった。かつて自身の蝶師復活の折、幼いながらも興味を示し、少しづつ教え込んだ息子であった。加えて、高校総体全国大会に駒を進めたレベルであった。

素材の選別、仕入れ方、保管の仕方、道具類の作り方、仕掛けの手順、各種刃物の選び方、使い方、研ぎ方、各流、各派違い、堅帽子、和帽子、車角、節抜き、浅懸け、深懸け、十文字、一字文字、切り上げ、大控え、家紋、飾りつけ、さらに鏝の要締、縫い方各種、糸の作り方、糊のこと、横の輪、縦の輪、門、星、飛ばしの止め方 5 種クスネとギリコ、技法の一切、伝えることは多く、長い年月を要したが穏やかで満たされた晩年だった。

1993（平成 5）年 86 歳で静かに息を引き取った。

「孝義」の技は 2 代目に引き継がれた。